

Desfontaines : *L'illustre comédien ou le martyr de saint Genest*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1644年(?)。「盛名劇団」が上演した可能性あり(ランカスター)。
出版	1645年。
出典	明確に出典とされるものはない。史実としては Surlius の <i>Vies des saints</i> 、テーマを共有する先行作品としては、Lope de Vega 作 <i>Lo Fingido Verdadero</i> (出版1621)、コルネイユ作『ポリュুক্ত』(出版1643)など。

出版時のこの作品に著者の名は記されていない。が、パルフェ兄弟によってデフォンテーヌの作品とされるようになった。作者については不詳である。俳優として舞台に立ち、一時地方劇団の座長もしたらしい。1644年にモリエールの「盛名劇団」に関わったことから、ランカスターは同劇団が上演した可能性が大いにあるとしており、ほぼ1年後にロトルーの『聖ジュネ正伝』が上演された事実は、デフォンテーヌの舞台が成功した証しだとフォレストイエはみる。いずれにしろ何世紀ものあいだうち捨てられていたこの作品は、バロックの復権を背景にした『聖ジュネ正伝』への注目によって、同じテーマ(劇中劇における役者と役柄の融合)を扱った作品として、いくらかの脚光を浴びることになった。しかし、古典劇の規則を遵守している(時は24時間、場所はディオクレティアン帝の宮殿の一室)一方で、劇中劇物としての収斂と統一感がないのは、ジュネとパンフィリ、アリストイッドとリュシアヌの、あまり説得力のないプレシユーズ的な気取りの多い恋愛をもうひとつのテーマとしているせいである。恋愛を事の不可欠な動機とする時代の感覚に従った処置ではあるが。

[第一幕]

ローマ皇帝の地位を獲得したディオクレティアン(Dioclélian)は、今や栄光の絶頂に上りつめ、帝位の享受に水を差すものは何ひとつないように見える。しかし、ローマの神々を否定する少数のキリスト教徒の存在が、彼の心を悩ませていた。過酷な拷問や処刑も、彼らを再改宗させ、根絶やしにするには至っていない。評議員リュティル(Rutile)は、肉体を痛めつけるよりも理性に訴えて正気を取り戻させる方が有効だ、と提言する。そのためには、観客の情念を自由に操れる優れた役者たちにキリスト教の儀式をパロディとして演じさせ、嘲笑的にすればよい、教徒らは恥の念によって盲信から覚めるだろう、と。ジュネ(Genest)の一座がこの重大使命を果たすべく、実験的に御前芝居を打つことになる。ジュネは上演の趣旨をくみ、自らの体験を即興で芝居に仕立てることにした。すなわち、キリスト教徒に改宗した父親と姉妹が彼自身にも改宗を迫ったので、策略を弄して切り抜けようとした体験である。父親役をアンテノール(Anthénor)、姉妹役をリュシアヌ(Luciane)、ジュネとその恋人パンフィリ(Pamphilie)は本人の役、ジュネの友人でパンフィリの兄弟役はアリストイッド(Aristide)が演じることにする。成功すれば報酬は大きく、名優ジュネの名は帝国中に広まり、

流浪の一座の栄光は不動のものになるだろう。まさに「ここが勝負時」(ジュネ)、一座の全員が勇み立つ。

【第二幕】

開幕前、寵臣アキラン(Aquillin)が役者の条件を皇帝に解説する。外見は何らかの美点があればよく、美声と優雅な動作に加えて判断力、器用さ、記憶力、自信、衣装を選ぶ審美眼が必要だが、不可欠なのは知性で、その裏打ちがないと全ての長所が損なわれる、と。そして実名を役名とした即興芝居が始まる。

リュシアーヌが涙ながらに兄弟のジュネに、キリストの教えに目を開くよう説得している。キリストは自身の恥辱と生命によって全人類の救いと栄光を贖ったのだから、と。だが「理性の力」を誇るジュネは、肉親の情に負けてそのような「夢物語」を信じる気はなく、「この世の大きな権力にちゃんと与したらどうか」と取り合わない。父親アンテノールが登場し、「子の務め」として父親が選択した宗旨に従い洗礼を受けるべきだ、と強硬な態度に出る。ジュネがあくまで拒否するので、父は勘当を言い渡し、娘と共に退場。ジュネは恋人のパンフィリと友人のアリステイドに窮状を打ち明ける。パンフィリは、ジュネがどのような逆境にあっても愛情は変わらないと断言するが、ジュネは、廃嫡されれば相続権と名誉を失い、パンフィリを幸福にすることができない、と苦悩する。アリステイドがそこで提案をする。改宗する振りをし、洗礼の儀式を形だけ受ければよい、信仰心がなければ何の悪影響もこうむらない、「偽の敬意によって本物の財産を手に入れるんだ」、と。パンフィリは悪い結果を予想して不安がるが一蹴される。

【第三幕】

幕間。皇帝は、役者たちが「感じてもない苦悩」をあまりにも巧みに表現するので、「芝居とは思えない」と感嘆する。アキランは、次の場面はとりわけ驚異的であり、「目の当たりになさってもお信じになれないでしょう」と期待させる。

芝居再開。ジュネは、洗礼を受けて奇跡を体験し生まれ変わった、と語り始める。共演者たちは戸惑いを見せるが、皇帝ら観客は、迫真の演技に感心し合う。ジュネは語り続ける。光とともに天使が出現して一冊の書物を差し出したので見ると、そこには自分が犯した罪の数々が記されていた。しかし、天使がたらした水滴でその記述は消滅し、自分の心はかつてない平静に満たされ、魂は浄化され、強烈な喜びがもたらされた、と。さらにジュネはそれまで信奉していた「偽の神々」を攻撃し始めたので、皇帝は苛立ち、芝居中止を言い渡す。だがジュネは沈黙しない。人の手によって造られた偶像を崇拜する皇帝は人民の支配者でなく奴隷であり、現世の権力や名誉は神の永遠の栄光の前には空しい、と雄弁に主張する。改宗にやっと気づいた皇帝は激怒し、ジュネの逮捕と拷問を命じる。皇帝の怒りは共演者にも及ぶ。芝居と事実を混同し、全員同罪だといきりたつが、自分たちは皇帝の命令を果たすべく虚構を演じたまでのこと、罪人はジュネひとり、と言う役者たちの抗弁を受容する。パンフィリは恋人に軽視された女の怒りをあらわにしたので、皇帝は、ジュネが

拷問に屈しなければパンフィリの怒りに委ねよう、と約束する。

[第四幕]

残酷な責め苦にも心を変えなかったジュネがパンフィリの前に連れてこられる。心底では愛しているのだが自尊心の強い彼女は、「愛と信仰を裏切った」恋人を激しく糾弾する。ジュネは、暴君と神々に対してなされる限り「裏切りは無垢で美しい」と主張し、改宗前の自分こそ「あなたよりも自分の快楽を愛していた」、と懺悔する。さらに、唯一神の恩寵によって彼女に救済と幸福がもたらされ、二人の魂が永遠に結ばれるならば、自分はどのように非道な拷問も喜んで受け入れる、と真の愛の理念としてキリスト教を説く。パンフィリは、苦痛と死をも超越するジュネの愛の強さをようやく納得し、共に鉄鎖につながれる決意をする。新たな世界に開眼したパンフィリの目の輝きを見て、皇帝らは彼女が説得に成功したと誤解をする。が、彼女は、不首尾に終わったとはいえ説得を試みて、その努力の報酬として宮廷人としての地位を授かった一座の他の役者たちを批判し、果てに自らもキリスト教徒であることを堂々と宣言する。一同の驚きと皇帝の怒り。パンフィリは、ジュネから聞いたばかりの、生命の創造ができない偶像神やその信奉者が人間の生命を奪うことの理不尽を説き、逮捕される。

[第五幕]

地位と富を授かって先ほどまで有頂天だったアリストイドの様子が暗い。心配したアンテノールが問いただすと、アリストイドは、二人の仲間の悲惨な運命に動じもしないアンテノールたちを非難する。それを聞いた恋人のリュシアーナは、アリストイドがパンフィリを愛していると誤解し、怒りの言葉を放って飛び出していく。二人の男は後を追う。さてリュティルは、皇帝を不快にせぬかとためらいながら、広場での処刑の光景を報告する。ジュネとパンフィリは処刑台の上に向かい合わせに立たされた。既に様々な拷問に耐えてきたジュネの身体は見るも無惨な状態。その彼を見据え、彼女は悲壮な演説を始めた。この死の装置である処刑台こそ二人の聖なる婚姻の甘美な床、死刑執行人や見物人は豪華な婚礼の立会人、二人は神の国で結ばれるのだ、と。ジュネは恋人の毅然たる態度に満足し、さらにその場で火と鋼の拷問を受けるがびくともしない。パンフィリの誇り高い様子に畏怖さえ抱いた執行人だが、リュティルが職務を思い出させたので、一撃のもとに彼女の首をはねた、と。皇帝はすぐさまジュネの命も絶つよう命じる。続いてアキランが「悲惨な事故」を告げにくる。どんな経緯があったのかリュシアーナが入水自殺をし、テヴェレ河に漂う彼女の遺体を見て、アリストイドも同様に橋から身を投げようとした。アンテノールが止めようとしたが若者の力は強く、二人は絡み合ったまま深みに落ち、溺死した、と。皇帝は、現世の栄華よりも神の国を選んだ殉教者たちに対する不可解な思いに加えて、人間の運命の不条理に愕然とし、自らの地位と権力の虚妄を思い知って苦悶する。神の世界に目を開かれない限り、皇帝が救済されることはない。

(鈴木美穂)

Rotrou : *Le Véritable saint Genest*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1645年か46年。オテル・ド・ブルゴーニュ座。
出版	1647年。
出典	史実としては <i>Surius</i> の <i>Vies des saints</i> 。 先行作品としては、Lope de Vega 作 <i>Lo Fingido verdadero</i> (出版 1621)、コルネイユ作『ポリュークト』(同 1643)、Desfontaines 作 <i>L'illustre comédien ou le martyr de saint Genest</i> (同 1645)。

初演時のタイトルは *Le Feint véritable* (『真実の見せかけ』) だったらしい。そのタイトル通り、矛盾撞着語法と演劇に関する比喩に満ちた本作品は、演劇についての「無償の」(フォレストイエ) 演劇であり、バロック演劇の傑作として遇されている。粹となる劇と劇中劇は端正かつ精妙な入れ子構造をなし、前者ではジュネの改宗と殉教、後者ではジュネ扮するアドリアンの改宗と殉教が演じられる。両者の鏡像関係は、物とそのイマージュ、イマージュとその反映について「豊穰な疑念」(シェレール) を生み出し、現実を内側から崩し骨抜きにする。「この芝居がもたらす唯一の現実は、芝居という現実だ」(演出家 André Steiger)。芝居=虚構という現実に残ったジュネの存在は、バロックの様態の象徴であると同時に、俳優とその役についての普遍的な議論を開く(同化か異化か/自分の中に役を見出すのか役の中に自分を見出すのか/役の中に入るのか自分の中に役を入れるのか)。一方また、比喩ではない芝居の現実、舞台上演や役者を巡る現実(舞台装置、楽屋、稽古、芝居談義)が、作者の諧謔と愛情を見え隠れさせながらそこかしこに侵入している。『聖ジュネ正伝』は、ロトルーの劇的想像力が「渾身の力をもって発揮された悲劇」(モレル) であり、芸術家のモラルを問う作品でもある。

[第一幕]

ローマ皇帝ディオクレティアン (Dioclétian) の娘ヴァレリー (Valérie) は、連夜の悪夢におびえている。父親の命令で羊飼いと結婚を強いられる夢だ。その時東方から皇帝らが凱旋する。ディオクレティアンはいまひとりの皇帝マクシマン (Maximin) の武勲を讃え、娘を与える。マクシマンの出自は羊飼いである。ヴァレリーは夢の意味を悟って満足する。「なるほど羊飼いいには違いないわ、でもローマを統治する羊飼いなよ、…私の恐怖はこうして私の望みになったのね」二人の婚約祝儀として芝居が上演されることになり、名優ジュネ (Genest) の一座が招かれる。ディオクレティアンとジュネのあいだでひとしきり演劇談義が交わされてから、ヴァレリーの所望もあって、演目は殉教劇に決まる。マクシマン自身が処刑判決を下した、アドリアン (Adrian) の改宗と殉教の物語をジュネは選ぶ。したがってその芝居にはマクシマンも登場する。「喜んで自分が登場人物となる芝居の観客となろう」と皇帝は言う。

[第二幕]

舞台がしつらえられ、ジュネは舞台装置家に様々な注文をつける。そして女優マルセル (Marcelle) の愚痴に中断されながらも、客入れ直前まで稽古を続ける。アドリアンの心情に支配されそうになり、「模倣することが大事だ、なりきってはならない」と自戒した時、「続けるがいい、そなたの模倣は無駄にはならぬ」という声が天から聞こえる。開場を告げに来た舞台装置家は放心ぎみのジュネを見て、「何度も役を稽古してきたんだ、今度は役を超えようとしているのだな」と感心する。宮廷の面々が席に着き、好みの芝居について談話しながら開幕を待つ。

リュートの音とともに開幕。マクシマン帝の寵臣アドリアンは、長らくキリスト教徒迫害に手を下してきた。だが教徒たちが従容として死につくの繰り返し目撃するうち、自らも目を開かれて改宗するに至った。友人の護民官が、密告があったとアドリアンの釈明を求めにくる。アドリアンは教徒であることを認め、友人の説得にも心を変えず、鉄鎖につながる。

幕間、ヴァレリーは役者たちをねぎらいに楽屋に行く。

[第三幕]

ヴァレリーが戻り、ごった返した楽屋の様子を伝える。

芝居の再開。マクシマン帝は反逆者が身近にいたと知って深く失望し、激しい怒りをアドリアンに向ける。アドリアンは悪びれずキリスト教を擁護し、投獄される。説得を依頼され面会に来た妻ナタリー (Natalie、マルセル演ずる) に、アドリアンは不動の信念を告げる。するとナタリーは、自分は生まれながらのキリスト教徒だと告白し、二人は苦しみを共にすることを誓う。ナタリーは説得失敗と護民官に伝え、夫の死を見届けてから自らも沈黙を破り教徒として死ぬ決意をし、退場。

マルセルのファンの宮廷人が楽屋に押しかけ、その騒ぎで芝居が中断される。混乱を収めてほしいとジュネが皇帝に要請する。

[第四幕]

ディオクレティアンの介入で騒ぎは収拾される。

芝居がまた再開される。護民官がアドリアンに拷問と死刑を宣告する。アドリアンは最後に妻との水入らずの会見を望む。ナタリーは夫が鎖を解かれ監視もないのを見て転向したと思いきみ、激しく彼を非難するが、誤解はアドリアンの言葉でまもなく解ける。ナタリーは彼を励まして言う。「存在も非存在もほとんど同じ一瞬のこと、…戦い、苦しみ、自分自身を獲得するのです、キリスト教徒として死ねば、一瞬の苦悶で永遠の幸福が得られるのです」(隠れ) 司祭もアドリアンを力づけにやってくる。

だが、アドリアン＝ジュネの様子が奇妙だ。司祭役の役者に本名で呼びかけ、「アドリアンは既に語った、今度はジュネの語る番だ」と言い、舞台裏に姿を消してしまう。舞台に残された共演者たちは、座長が台詞を忘れた、今のはアドリブだと囁き合う。ヴァレリーは、「観客を煙に巻くために

共演者も欺くなんて、これがまさに最高の演技というものね」とご満悦だ。ジュネはなかなか戻らず、共演者の当惑は大きくなるが、観客はこれも巧みな演出だと思っている。やっとアドリアン＝ジュネが現れ、神に呼びかける。観客はその演技の迫真性に驚嘆する。共演者は、プロンプターは誰だ、と慌てるが、アドリアン＝ジュネは、「天使が私のプロンプターだ」と応じる。ディオクレティアンに向かって「これはもはや芝居ではなく真実なのです」と語りかけ、長々と信仰告白をするが、皇帝はまだ半信半疑である。しかしジュネがローマの神々を冒瀆するに至ってようやく事を理解し、怒りを爆発させる。ジュネは逮捕される。共演者も取り調べを受け、今まで演じた役柄を尋ねられた後、お咎めなしとされる。

[第五幕]

投獄され、神の戦士として殉教の決意をあらたに固めているジュネのもとに、マルセルが棄教の説得にやってくる。座長としての責任に訴え（座員の生活はどうなる？）、芸術家として無知な下層民のものであるキリスト教に魅惑されることの批判をし（ジュネの美意識は権力の洗練とともにあったはず）、彼の心理分析までする（俳優として若さが失われつつあることの不安と十分に報われない職業への不満から、厭世的になったのでは）が、どれも功を奏さない。ジュネは処刑場に連行される。ヴァレリーは、婚約祝いの喜びを損じないよう、罪のない役者たちの生活手段が奪われないよう、父親にジュネの助命嘆願をするが、そこに総督から処刑の報告が入る。「あの華麗な役者、英雄たちの再現者、ローマ演劇界の栄光、しかし自らの人生においては下手な役者は、…むごたらしい場面を最後に悲劇の幕を閉じました。…三角木馬、灼熱の刃、鉄の爪、燃えさかる松明、いずれも彼からため息ひとつ奪えず…我々の方が彼以上に恐怖と痛みで苦しみました。…ついに私は悲劇を最終場面に導き、彼の首を断ち切らせました」ディオクレティアンは慚然と、役者たちは涙に暮れて舞台を去る。ヴァレリーを慰めるマクシマンの台詞で幕は閉じる。「自ら招いた不幸です…彼は死ぬことで、演技（見せかけ）を真実にしたかったのですよ」

（鈴木美穂）